まちの生き方をまちから考える

TUNA BOOK

ツナブック

VOL.2 まちの、デザイン

TUNA BOOK

「ツナブック」とは、「つながるブック」を縮めてツナブック。
人と人や地方と都市、人と自然、そして人とまちがつながることを目指すフリーペーパー。

長野県辰野町から「まち」をテーマに考えて行きます。

いろんな人の生き方や暮らしぶり、そして働き方、遊び方、学び方。
それらは、人それぞれで、正解があるものではありません。

「人それぞれいろんな生き方がある」。
そんな当たり前のことを忘れそうになることがあります。
「人それぞれいろんな生き方がある」。わかっていても、それは自分とは違う話だ、と思ってしまうこともあります。

いろんな生き方に触れることで、
読んだ人が少しでも楽になったり、時には熱くなったりする。
そんな冊子を目指しています。

２０２０年、新型コロナのパンデミックによって私たちの暮らしは大きく変わりました。マスクをして、人とは距離をとって暮らす。
人と距離をとって暮らす経験が、私たちとコミュニティの距離を近づけてくれた気がしています。家にこもっていた時間から、外に出て友人と笑い話をしたときに感じた幸福感が、私たちをより良い方向に連れて行ってくれると思います。
いえ、私たちでより良い方向に進んでいくのだと思います。

「トビチ商店街」という、まちのデザイン

まちの「デザイン」

「デザイン」と聞いた時、どんなことを思い浮かべるだろう。商品パッケージ、ポスター、ウェブサイトといったものを思い浮かべる人や設計や内装といった建築物を思い浮かべる人もいるかもしれません。

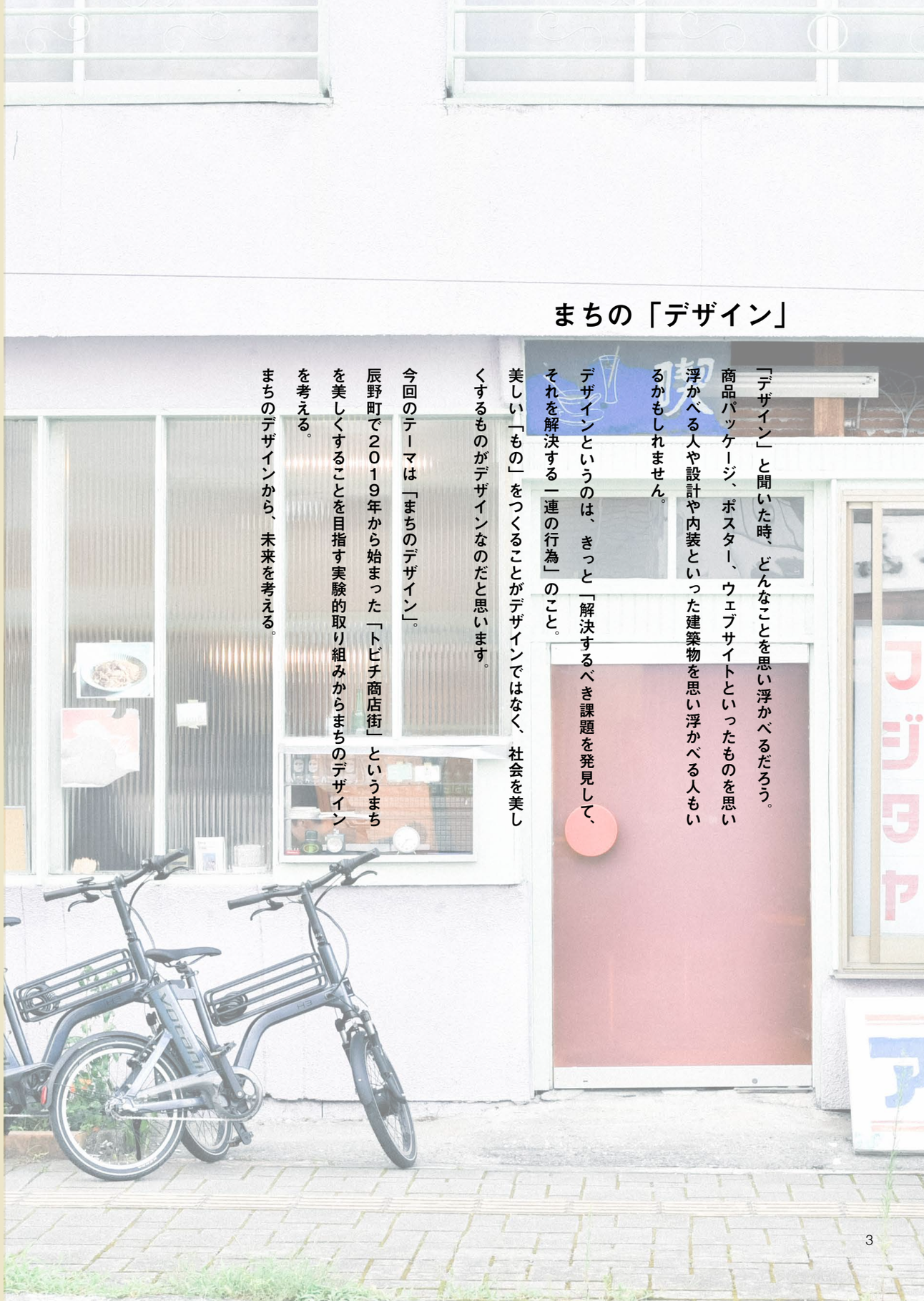
デザインというのは、きっと「解決するべき課題を発見して、それを解決する一連の行為」のこと。

美しい「もの」をつくることがデザインではなく、社会を美しくするものがデザインなのだと思います。

今回のテーマは「まちのデザイン」。

辰野町で２０１９年から始まった「トビチ商店街」というまちを美しくすることを目指す実験的取り組みからまちのデザインを考える。

まちのデザインから、未来を考える。



トビチ商店街

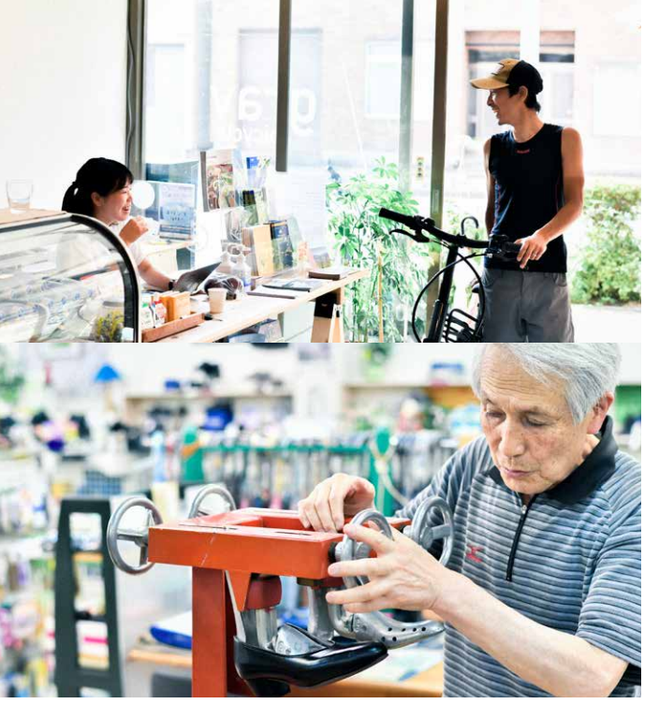
飛び飛びの商店をつなぐ、トビチ商店街というまちの再編集

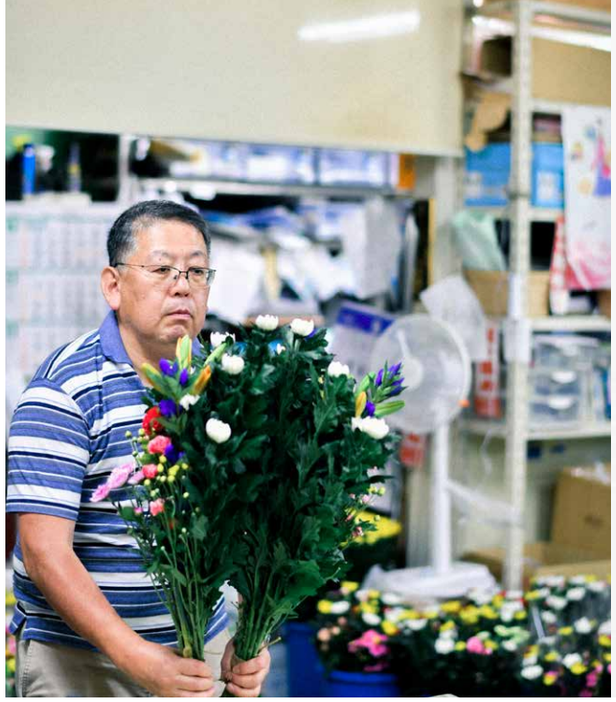
長野県辰野町。松本市から少し南に位置する人口約２万人の小さなまち。このまちに点在する飛び飛びの商店を繋ぎ直して、新しい商店街の形をつくる。

老舗も新店舗も閉じたままの店舗もひっくるめて、地域としての「楽しい」をつくろう。

歩いてもいいけれど、自転車で巡ると楽しいくらいの経済圏。飛び飛びの商店をつないで、新たな価値観で商店街をつくる。商店街をショッピングストリートとしてではなく、場所を拡張しながらそのまちのコミュニティ空間として再定義していく。それを私たちは「トビチ商店街」と名付ける。

トビチ商店街の取り組みを進めるまちづくり会社一般社団法人〇と編集社メンバー。左から小口良平、渡邊のどか、赤羽広太、奥田悠史、山下美紗
トビチ商店街 HP：https://tobichi.jp





トビチ商店街って なんだろう

辰野町のメインストリート、「下辰野商店街」は、辰野駅を起点に約1㎞近く続く長い商店街。まだまだ元気に営業しているお店もたくさんあるが、シャッターのしまったお店はそれ以上に多い。

この商店街を再編集しよう、と2019年春に始まったのが「トビチ商店街」という取り組み。（一社）○と編集社が事務局を担い有志が集まって進めているプロジェクト。

一昔前までは、歩いて買い物に行くのが当たり前だった時代があって、当時、商店街はまちの商業の中心でした。それから地方は、みるみる車社会になって「駐車場がないと不便」というのが地方の当たり前に変わりました。そうすると、これまでのまちの中心から離れた広い場所に大型のショッピングモールができて、モールの中に新しいまちができました。大型モールへの変化は地域の文化の変遷なんだと思います。

では、これからの私たちのまちの商店街をどうしよう、と考える。

大切なのは、これからのこと。昔の商店街を取り戻すっていう話ではありません。あるいは、大型ショッピングモールのせいにする訳でもない。それは、どんな商店街が自分の街にあったら嬉しいか、を考えること。商店街はたくさんの機能を持っています。昔の商店街もきっとそうでした。地域のコミュニティであり、買い物する場所であり、働く場所だったはず。子ども達は、商店主に見送られながら学校に行き、商店に寄り道をして帰る。商店街が持っていた価値そのものに目を凝らす。そうすると、ぼんやりと私たちが目指す商店街の形が見えてきました。

私たちは商店街やこのまちに残る「小さな宝物」みたいな文化や文脈を活かしながら、次の商店街をつくりたい。「商店街」という言葉が持つ広さや考え方を拡張してもう少し広く捉えようと思います。

歩いてもいいけれど、自転車で巡ると楽しいくらいの経済圏。飛び飛びの商店をつないで、新たな価値観で商店街をつくる。商店街をショッピングストリートとしてではなく、場所を拡張しながらそのまちのコミュニティ空間として再定義していきます。

それを私たちは「トビチ商店街」と名付けました。

みんなが生きやすい まちをつくろう

このまちにどんな未来をつくりたいか、を考える。例えば、2030年の辰野町はどんな「まち」になっているだろう。つくりたい未来から逆算して考えていく。

未来は不確実なので、逆算したからってつくりたい未来を作れるか、はわかりません。それでも、他力本願、放っておいてつくりたい未来がやってくることは、ないと思います。

私たちは、多様な人たち（日本人も外国人も旅行者もビジネスマンも地元の人も初めての人も、大人も子供も）がこのまちを歩いたり、自転車で行き交ったりする未来を想像したい。様々な価値観が許される多様な文化が生まれるまちにしたい。その方が、いろんな人にとって生きやすい「まち」だと思うから。

例えば、地元のバーなんかで地元の人と旅行者やビジネスマンが話をしたりするシーンをイメージする。盛り上がって、「一緒に焚き火でもしようよ」、という話になったりして。田舎だからこそできる「まちづくり」があります。アウトドアフィールドが近く、空き店舗や空き家といった「余白」と「資源」がたくさんある。そこに仕事や文化が融合すればきっと面白い。

人々が多様性を認めるためには、多様性に出会う必要があります。多様な価値観や文化が混じり合うことで、人々は調和していくことができる、と信じています。

同じ文化、同じ背景の人たちだけで話していると、どんどん主語だけで話が通じるようになります。日本はハイコンテクストな社会と言われています。つまりは空気を読む文化。有言実行より不言実行が美徳。特に地域は同じバックグランドの人が多いので、そうなり

目指す未来の1日を
みんなで共有するイベント「トビチ market」

「私たちが暮らすまちの商店街は、どんな風だったら、嬉しいだろう」という小さな問いから始まったトビチ商店街。
そのトビチ商店街の「10年後の1日を未来からお借りする」ことをコンセプトにしたマーケットイベント「トビチ market」が2019年12月7日に開催されました。
下辰野商店街周辺21の空き店舗、空き家、空き地を整備するところから始まり、県内外から54店舗のお店が辰野町に集結。そして、町内外から4000人を超える人たちが冬の辰野町を訪れてくれました。
まちは人だから、人が動けば、まちも動く。少しずつ。
私たちが暮らすまちが、「みんなが生きやすいまち」だったら最高だ。

トビチ商店街

まっすぐな道もあれば、
曲がった道もあるし、
背の高い店舗もあれば、
背の低い店舗もある。
開いてる店舗もあれば、
空いてる店舗もある。
そういうの全部で、
このまちの商店街。

ロゴの「トビチ」は、道を表しています。真っ直ぐな道もあれば、曲がった道もある。白い点は開いてる商店、黒い点は空いてる商店。背が高い商店もあれば、低い商店もある。そこには、住民も、旅人もビジネスマンも日本人も外国人も様々な人がいる。

やすい。
全く違う文化・文脈を持った人が集まるからこそ、見えなかった文化が言語化される。それが大切です。見えなかった文化が見えるようになったとき、その文化はその地域の独特で独自の文化になるはずです。
そして、様々な「好き」が集まることでまちは多様になり、寛容になっていきます。独自の文化と多様な文化が混ざり合っていくことで、いろんな人にとって生きやすいまちになっていくのだと思います。

そんな未来のためには商店街が必要です。サテライトオフィスや会社、クラフト工房、飲み屋さんやパン屋さんやごはん屋さん、服屋さんに自転車屋さん。宿もあった方がいいし、キャンプ用品店なんかもあると嬉しい。

商店街で商業を回していく。地域からいかにサステナブルな経済を作っていくか。地域だからできるビジネスがあります。日本の地域が抱える課題は世界が抱える地域の課題になっていきます。少子高齢化、人口減少最先端の日本の地方を考えることは、デザインそのものだと思います。

再開発とは違うスキームで持続可能な暮らしを作るにはどうしたらいいでしょうか。自分たちの次の世代にどんな未来を残していくか。小さな商店街づくりから考えていく。トビチ商店街はその旗印。

私たちが目指すのは、持続可能で、いろんな人が生きやすい優しいまちづくり。

昭和12年頃の辰野駅まえの商店街の風景

辰野町の空き店舗が、ワクワクするお店に変わる1日限定のマーケット。

誰かと未来を共有するのは、とても難しいことです。「私たちはこんな未来だったらいいなと思っています」とか、「こういう商店街にしたいんです」とか。頑張って言葉で伝えていても、意外なほどに伝わっていなかったりします。

「こういうことをやりたいんです」と言った時に、「面白そう、頑張って」と言われたとして、そのあとにやりたいことを実現したとき、多くの場合多分こう言われます。「君がやりたかったことってこういうことだったんだね」と。

短いプロジェクトだったらそれでもいいかもしれません。ですが、10年先のことは、10年先にしか起こりえません。10年後に「君たちはこういうことをやりたかったんだね、もっと早く言ってくれれば、協力できたのに」、なんて言われる事もあるかもしれません。

だからこそ、トビチ market のコンセプトは、「10年後の1日をお借りすること」。それはつまり、僕らは10年後にこんな日常を作りたいんですが、みなさんどう思いますか?というプレゼンテーションでもありました。

ことばで言ってもなかなか伝わらないことを、一緒につくって共有する。これこそ、「まちのデザイン」にとって必要なことなのではないかと思います。

わからない人を置いていくのではなく、わからないなら、一緒に体験しよう、と努力をしてみる。なぜなら、私たちがつくりたいトビチ商店街というのは、みんなが生きやすいまちづくり。多様性を受け入れる町です。いろんな人がいて、いろんな人が笑顔で生きていけるまちをつくりたいのです。だからこそ、私たちはトビチ商店街というビジョンをまちの人と共有しようと考えて、10年後の1日を借りてくるという実験みたいなイベントに命をかけたのです。

空き店舗の掃除からはじまるイベント

10年後には、飛び飛びの商店がもっと増えていて、まちにはいろんな人が歩いているはず。だからこそ、公園や広場にお店を並べるマーケットをするわけにはいきません。空き店舗を片付けてそこにお店をオープンさせたかった。

○と編集社の赤羽代表とプロジェクトマネージャーの山下さんが中心になって、「空き店舗を使っていいですか」、と家主に交渉して周りました。そして、荷物が残っているお店は、片付けと掃除をする。12月のイベントのために9月から空き店舗の掃除がはじまりました。するとちょっとずつ話を聞きつけた地域の人たちが掃除を手伝ってくれるようになっていきました。

空き店舗を使わせてもらえるか交渉して、掃除して。時には壁をペンキで塗るところまでやりました。

そこには「10年後の1日を前借りするのだから、綺麗な方がいいじゃない」という思いがみんなの中にあったのだと思います。そうやって、1日限定で開催されたトビチ market には、4000人を超える人たちが訪れてくれました。商店街に人が歩いているだけで、なんだか泣けてくる。ともにイベントを作り上げたメンバーはみな、町を歩く人たちの後ろ姿をみながら、泣き笑いを浮かべていたのでした。

伝わったことと伝わっていないこと

トビチ market という取り組みそのものをみると、「商店街の活性化」という活動と思われるかもしれません。これは間違いではないのですが、少し違います。

空き店舗を資源として捉え直して、そこにいろんなお店が入っているワンデイマーケット。それは、端からみれば「商店街活性化」、「空き店舗利活用」ということと変わらないのかもしれません。方法は似ているけれど、目的が少し違います。

まちの未来を見つめて、その未来をつくるために、商店街はどんな場所だったらいいだろう、と考える。商店街のシャッターをこじ開けることが目的ではありません。閉じたままのシャッターがあってもいい。昔から続く商店もこのまちの宝物だ。このまちに生まれる新しい何かが、次のまちを形作っていく。

それが、私たちが「トビチ market」に見たかった風景なのだと思います。

2029年12月7日のトビチ商店街がどんな風になっているか、みなさんも楽しみじゃないですか?

よかったらご一緒にどうでしょう?

あずかぼ店主の山浦祐貴さんと地域の人たちつくった店舗

トビチ商店街な人々

トビチ商店街を構成しているのは、実は町全体そのものです。老舗も新しい店舗も「トビチ」という謎の価値観に共感してくれる人たちがゆるやかにつながっていくことで、ぼんやりと浮かび上がるのがトビチ商店街です。ぼんやりと浮かび上がる輪郭の中で、町にあるシャッター店舗や風景もトビチ商店街の大切な要素なのだと思っています。ここからは、トビチなお店を紹介します。

農民家ふぇ あずかぼ

下辰野商店街から北に５kmほど離れた川島地域にも「トビチ商店街」は続いています。自転車でめぐれるくらいの拡張商店街がトビチの特徴。

縁もゆかりもないけれど、ご縁がつなぐお店づくり

商店街を抜け、国道１５３号を北上して川島地域に入ると、とたんに風景が変わります。川島地域は、田んぼが一面に広がる、里山風景と集落の中心を流れる横川川が美しい自然豊かな地域です。

川島に入って程なく、「農民家ふぇ あずかぼ」の看板が見えてきます。

あずかぼは、明治時代から続く古民家をリノベーションして２０１８年にオープン。お肉や魚をつかわずお野菜を中心にした料理を提供するお店です。

店主の山浦祐貴さんは、東京生まれの33歳。両親と弟の４人で長野県塩尻市に20代前半で移住したのをきっかけに、植物性の材料のみでつくるお菓子の販売をスタートさせました。

山浦さんのお菓子に固定のファンがついてきたことをきっかけに、店舗を探すようになりました。「店舗を探している時に、辰野町のホタルまつりでお菓子を販売させてもらったのがきっかけですね」と山浦さんは話します。

そのときに、町役場の野澤隆雄さんに、店舗を探している、と話すとその日のうちに物件を案内してくれた。「その人じゃなかったらこういう展開にはなってなかったかもしれないですね」と振り返ります。

そこで、出会ったのが今の物件。大きな屋根が特徴的な古民家でした。

そこから、野澤さんや当時、「地域起こし協力隊」だった赤羽孝太さん（現○と編集社代表）たちの協力のもと、計画を進めていきました。

DIYを進めていると地域の人たちが顔を出してくれるようになりました。「この地域では、誰かが何かをやると必ず一度は顔を出してくれるんですよ。それで、どんどん知り合いが増えていきました」と笑顔で話します。

昔ながらのお建前が地域に家を開くイベントだったように、DIYイベントが地域にお店を開いてくれました。手伝ってくれた人たちにお昼ご飯を振る舞って笑い合いました。その時間があったから今があるのだと思います、と山浦さん。

お店を開いた後も地域の人が訪れてくれた。「この地域には歩いてごはんやお茶に行ける場所がなかったので、とても喜んでもらえて。普段着で行けるお店ができて嬉しいと言ってもらったりして」と笑う。

山浦さんは、「野菜料理の美味しさを知ってもらいたい」といいます。お肉や魚ももちろん美味しいですが、ベジ料理も美味しいんですよね。こういう美味しさもあるよ、ということを届けたいですね」。

幼少期、体が弱かった山浦さんは、お母さんが作ってくれた食事で改善してきた記憶が原体験。

押し付けることはできないですが、たまにはこういう料理もいいな、と思ってもらえたら嬉しいです。

お肉や魚を使わずつくるランチプレートやカレーが人気メニュー。

農民家ふぇ あずかぼ

営業時間：11:30 ～ 17:00
定休日：月、火、水、木（祝日の場合は営業）
住所：長野県上伊那郡辰野町大字上島 758
TEL：090-1203-1006

兄・利一さん（写真右）がホールと出前で、弟・弘章さんが調理担当。
かつては反対だったのが、弘章さんが足を骨折した時に交代して今もそのままなのだとか

神田食堂

トビチ商店街は、お店・店主同士の緩やかな関係性を繋いでいます。下辰野商店街の中でも、加盟しているお店も加盟していないお店もありますが、それが良いと考えています。

神田食堂　兄弟で40年。呼吸するように働く2人。

下辰野商店街のちょうど真ん中あたりに、昔から地元の人に愛されるお店があります。それが神田食堂。利一さん（72歳）と弟の弘章さん（69歳）兄弟が切り盛りするお店です。昭和32年の春にお二人のお父様が開業してから、64年間続く食堂。

「神田さんがやっているのかな」、と皆さん考えていると思いますが、違うんです。店主は、赤羽兄弟。「どうして、神田食堂なのですか」と聞くと、「家の屋号なんだよ」と教えてくれました。

お二人のおじいさんが、当時住んでいた地籍「大字神田（おおあざじんでん）」から神田をとって屋号にしたのが始まりだという。長く続くお店には、店舗の名前一つをとっても3世代にまたがる物語があります。時間や歴史が生み出すものは、簡単につくれるものではありません。

こういうものこそが、地域の文化や宝物なのだと、ふと思います。

神田食堂の開業当時というのはラーメンが20円だった時代。私たちが知らない時代のことを利一さんはこんなふうに話してくれました。

「うちの父親は神田食堂を始める前、事業を始めて、大失敗。それでもまたこのお店を始めたんだよね。当時は真面目に頑張ればうまくいく時代だった。きちんとやっていればさ、食べられたんだよね。だけど今は、真面目にやっていてもなかなか難しい時代になっちゃったよね」と。

人気メニューの生姜焼き定食

体が元気なうちは働きたいと思っているよ

神田食堂には昔ながらの常連さんがめちゃくちゃ多い。平日だろうが、週末だろうが関係なく、地元のおっちゃんが昼間から楽しそうにお酒を酌み交わしているのです。昼間から全面喫煙席。

タバコを吸いながら、昔からの友達と昼間から笑い話に花を咲かせている。そんな姿を見ていると、こちらも嬉しくなる。

そういう幸せの形みたいなものを私たちも見つめる必要があるのかもしれません。友達と昼間から大笑いする。そんな時間が必要なのかもしれません。

「仕事は楽しいですか」そう聞くと、利一さんが突然、奥の部屋にいた弘章さんに声をかけます。「おい、仕事楽しいか」。「いいや、大変なことも多いな」。

弘章さんの返答を聞いて、「楽しいってのは、よくわからないけどね、体が元気なうちは働きたいと思っているよ」と話します。

赤羽兄弟は、呼吸をするように自然に働き、自分のペースを保って長い年月お店に立って来たのかもしれません。40年間ずっと一緒に働いていますが、一度もケンカをしたことがないといいます。二人の穏やかな空気感のおかげか、神田食堂は初めて行った人でも、「なんだか落ち着く」場所に感じます。

インタビュアーのおすすめは、野菜定食と生姜焼き定食です。ぜひ辰野を訪れた際は神田食堂の暖簾をくぐってみてください。

神田食堂

営業時間：11:00 ～ 21:00
定休日：水
住所：長野県上伊那郡辰野町大字辰野下辰野本町1634
TEL：0266-41-0057

店主の酒井猛さんと妻の文子さん。今年は結婚50周年を迎える。

サカ井 時計メガネ店

トビチ商店街には加盟していないけれど、この商店街で長年商店を続ける「サカ井　時計メガネ店」さん。店主の酒井さんにトビチ商店街、一緒にやりませんか？とお聞きすると「穏やかに過ごしたいので」と優しい笑顔で返答くださいました。既存店も新規店舗もシャッターもみんなに優しい商店街がトビチ商店街の目指す未来。いろんな形があっていい、と改めて思ったのでした。

長くお店を続ける秘訣は、真心込めてお客様と向き合うこと。時計のサカイ

小さなこのまちの商店街に、メガネ・時計店は3店舗あります。そのうちの一つである「サカ井　時計メガネ店」は、昭和10年創業、現店主の酒井猛（たけし）さんが父から受け継いだまちの時計屋です。量産化が進む中、時計やメガネの加工・販売までを行う職人がいるお店は日本全国で少なくなってきているように思います。

店主の酒井さんは今年80歳。20歳で実家を継いだ時から今までずっとお店に立たれています。当時、時計の修理技術を取得するには10年ほど丁稚奉公で修行するのが普通でしたが、お父さんの体が弱かったことから、長男の酒井さんは早く一人前になるため、時計学校で技術を学び、お店を継ぎました。

レンズが入れられず困っていたメガネ。酒井さんに相談したら、匠の技ですぐに入れてくれた。

60年の間で、かつては貴重品とされていた時計も、次第に量産化や価格の低下などにより業界全体が影響を受けました。そこで酒井さんは時計のほか、メガネや宝飾も扱い始めます。サカ井時計メガネ店はお客様ととても長いお付き合いをすることが多いといいます。「今年になって、25年以上前のメガネのレンズを変えて欲しいというお客様が2人も来店され、とても感動しました」と酒井さん。時計も30以上年使われている方が多いといいます。取材中も、昔買った商品の修理にきたお客様がいましたし。酒井さんは「随分長い間使ってくれていたんですね」と嬉しそうに目を細めて時計を触ります。

サカ井時計メガネ店のお客様はシニアが中心です。しかし話を伺っていて、大量生産のものではなく、オリジナルなものや古いものに憧れる若者たちのニーズを満たしてくれるとも感じました。それは酒井さんが職人の技を使って、できる限り柔軟に対応してくれるからです。「誠心誠意、お客様の要望に真意になって向き合っていますと、満足感が湧いてきます。できることはしますが、できないこともあるので、他の方法を教えてあげるなどしております」と話します。実際に、他店で断られたフレームにレンズを入れられず困っていたお客様が、酒井さんに相談したところ、匠の技を使ってすぐに入れてくれたというエピソードもあります。

「1日が無事に終わり、何事もなかった時のホッとした気分がとても好きです」。その言葉は、穏やかでゆっくりとしたまちの商店街の雰囲気とぴったり重なるのです。

サカ井時計メガネ店

営業時間：10:00 ～ 18:00
定休日：
住所：長野県上伊那郡辰野町大字辰野下辰野本町１６８０
TEL：0266-41-0305

高木徹仁（左）
2016年、長野県松本市に High-Five COFFEE STAND をオープン。現在までに同市で3店舗展開。いずれもシンプルにコーヒーに特化した店づくりをしている。

若尾浩和（右）
文化服装学院卒業。ニットメーカー、オリジナルブランド設立を経てアパレルショップ O'JAYS GO GO を経営。

大槻拓真（中央）
2007年から出身地である長野県箕輪町にヘアーサロン Room CHICORA を 立ち上げる。

改修前の様子。以前の店舗「春日薬局」さんだったことと、オープン日を春分の日に合わせたこともあり、店名を「Equinox（春分）」に。

Equinox STORE（イクイノックス）

2021年3月20日、春分の日に下辰野商店街に「Equinox STORE」という新しいお店がオープンしました。このお店は、松本でアパレルショップ「O'JAYS GO GO」を営む若尾浩和さんと、同じく松本で「High-Five COFFEE STAND」を営む髙木徹仁さん、箕輪町で「ヘアーサロン Room CHICORA」を営んでいる大槻拓真さんという3名がシェアしているお店。それぞれ辰野にゆかりがあるものの、町外を拠点にされている方達が開いた新店舗。

なぜ今、辰野町に出店するのか

――今回、辰野町にお店を開くことになったきっかけをお聞かせいただけますか。

若尾：僕は辰野出身で今も住んでいます。2018年、赤羽孝太さんにSTUDIOリバーをオープンするに当たって依頼を受けまして、お店の定休日を使ってポップアップストアを2018年の夏から始めたのが最初です。はじめは隔月でやっていたんですが、思いのほか南信のお客さんが目指してきてくれるようになりまして、毎月やるようになったんです。

――出店以降、辰野の人たちの装いが前にも増してオシャレになった気がします。高木さんはどうですか？

高木：僕、生まれは塩尻なんですが、もともとの本籍は祖母の住んでいた川島だったんです。実家も辰野町の街道沿いで、商店街にもよく来てたんですよね。お店として参加したのは、2020年7月の若尾さんのポップアップからですね。ゆかりもあるし、うちのお店に来たことがないお客さんに紹介できるというのがあって参加しました。出店してみると、毎回来てくれるお客さんがすごい多くて。月に一回しかお話はできないんですけど、ちょっとずつ仲良くなってるなっていう出会いもあるので、楽しく関わらせていただいてます。

――11月の若尾さんのポップアップストアには大槻さんも含めた3人チームで出られてましたね。

大槻：僕はお二人に乗っかったようなところがあるんですが、11月に試しに出店して、感触は良好でした。新しいお店では、オーガニック中心のシャンプーなどを扱います。そのうち量り売りにチャレンジしたい。辰野町って、試験的なことをやりやすい空気感のある地域だと思うんですよね、自分の中でイメージしてるものをいい形で表現できる、そういうまちだと思います。

――若尾さんはイベント出店がきっかけで実店舗を出したいと思われたということですか？

若尾：ポップアップではなくしっかり実店舗として表現したいっていうのが強い思いとして高まってきまして。店舗として表現する空間をつくりたい。お客さんと接した時の肌感を感じながらそう思うようになったんです。

高木：僕は、辰野は面白いかもって思っているときに、商店街にゆっくり落ち着いて過ごせるような場所が、コーヒー屋さんがない、と気づきまして。

――よくお気付きで（笑）。

高木：町中歩き回りましたから。僕は、コーヒー屋をやることしかできないし、来てくれる人にとってプラスになればビジネスとしてどうかというよりも、町としていい光景になったらいいなと。それだけの話なんです。結局なにか始める理由って、そもそも衝動というか。

大槻：僕は、辰野でお店を出すってなった時に「無理じゃないか」、みたいな言われ方すると、自分の中の反骨心が燃えてくる部分があります。やり方で変わると思うので。辰野で活動している方々を見ていると、売上や来店数みたいなこれまでのセオリーでは測れない価値があると思うんです。辰野にいることで自分も成長できるんじゃないかって。

――この商店街にお3人のような方がお店を出すことになるとは、数年前は想像もしていなかったです。

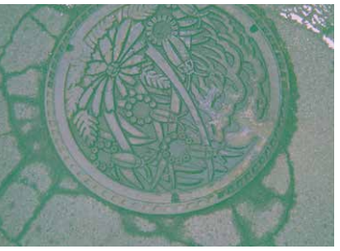
大槻：ある意味で、場所の景色を変えることになりますから、すごく責任があることで。覚悟を持ってお店をやっていくつもりです。

高木：2、3年とかではなく、二桁は続くお店であるように頑張りたいです。

Equinox STORE

営業時間：11:00 ～ 17:00
（月、火、水、土）
11:00 ～ 17:00（日、祝日）
定休日：木、金
住所：長野県上伊那郡辰野町辰野１７１０－６

Equinox STORE は、O'JAYS GO GO による「Rocaltus（ロカルタス）」と「PRIME WASH LABORATORY」、Room CHICORA による『kaymakli（カイマクリ）』、そして「High-Five COFFEE STAND」という４つの店舗が入った複合施設。



普段、車で通り過ぎてしまうことが多い商店街を子どもが歩くスピードで歩きました。子ども達と歩いたスナップ。メルカリで買ったフィルムは期限切れで、色がつぶれていたりして、何を撮ったか分からないものも多数。それでも、プラスチックのファインダーから見た商店街の景色は、いつもと少し違いました。

秘密基地を探すように、高架橋をくぐったり、駅の裏道を歩いたり。最近移転してきた和菓子屋さんで買い食いしたり、オーディオ屋のお兄さんにスピーカーの音の聞き比べをさせてもらったり。定食屋さんでご飯食べていたら、常連のおじさんに話しかけられたりして。

まちの商店街にも出かけてもらえると嬉しいです。気の合う人や面白い人が人が、たくさん暮らしていますよ、商店街には。

今回まちを一緒に歩いたまちの小学生。
右からなおやさん、らなさん、みなとさん。

商店街の記憶を次の世代と体感する

地域の小学生３人と一緒にトビチ商店街を歩きました。使用期限の切れた FUJIFILM の写ルンですシンプルエースをたくさん持って。

それは、私たちがみている商店街の風景と、小学生見ている商店街の風景の交換。

この商店街を私たちの世代が引き継いで、また次の世代に渡していくにはどうしたらいいのでしょう。

きっと記憶の共有が必要です。まちの面白さを一緒に歩いて体感する。そして、私たちも子どもたちが見ている商店街の風景を教えてもらう。そうやってコミュニケーションをとっていくことで、まちはつながっていく、のだと思います。

デザインから
まちの暮らしを考える

今あるものを、どう生かすのか。そして、これからどんな未来をつくるのか。デザインというのは、本来そういうものだと思います。

「デザインは、社会を美しくするものだ」とは、私が尊敬するデザイナーが教えてくれたことばです。

デザインは、社会を美しくするものであって、美しいものだけを作ることではないのだと思います。まちの課題や問題を発見する。このまちがこんなまちだったら楽しそうだぞ、という未来のことを考えてみる。

そうやって、考えたり妄想したことを、どうやって現実にしていこうか、と考えるのがきっとデザインなのだと思います。

トビチ商店街という考え方が、まちのデザインを考えるきっかけになってくれたら嬉しいです。

まちには、見えていないけれど大切なもの、知らない間に失われているものがたくさんあります。

20円でラーメンを出していたお店も、25年前に買ったメガネを直して欲しいとお客さんが来るお店も、お話を聞かなければ知らなかったことばかりです。

歴史あるお店も、今年オープンしたばかりのお店も、田園風景のなかに佇むお店も、まちの大切な宝物だと思います。

まずはまちの想いに触れるところから。デザインというのはそういうものかもしれません。

TUNABOOK　vol.2
まちの、デザイン

編集・取材・写真
奥田悠史 (◯と編集社)
山下実紗 (◯と編集社)
松永大地（ポケッツ）

グラフィックデザイン
ごみひづる（インク舎）

p.19~p.20 フィルム現像・プリント
フォトカノン戸越銀座店

一般社団法人◯と編集社
長野県上伊那郡辰野町辰野 1705-1　STUDIO リバー 3F

発行
辰野町
お問い合わせ：辰野町まちづくり政策課
〒 399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央 1 番地
電話：0266-41-1111（代）
FAX：0266-41-3976
http://www.town.tatsuno.lg.jp

発行日：2021 年 3 月

まちの生き方をまちから考える

TUNA BOOK VOL.2

ツナブック

無料

発行：辰野町